

保育者養成における特別活動プログラムの評価

西 浦 和 樹*・中 條 和 光**
松 原 勝 敏*・坪 井 貴 子*

Assessment of program of extra-curricular activities for teacher training course of preschool.

Kazuki Nishiura, Kazumitsu Chujo

Katsutoshi Matsubara and Takako Tsuboi

Abstract

The purpose of this study was to assess learning through “welcome party” program at department of early childhood education in “TAKAMATSU” junior college, in order to investigate the extra-curricular activities with four educational goals : growths of three abilities of (1) communication, (2) group activities, and (3) self-directed learning; and (4) use of educational situation supported by educational resources in community.

The important feature on the extra-curricular activity, of which seven laboratories were the basic unit, was to carry out collaborative learning for different grades.

To identify an effect of the curriculum, we made pre- and post-survey with several questionnaires. As the results, the post-surveys showed that almost all students reported the interesting extra-curricular activities. The findings suggest that students would be motivated to the extra-curricular activities, and acquire social skill.

1. はじめに

急激な社会情勢の変化に伴い、子どもをめぐる環境が大きく変化してきている。その中で多様な保育サービスの提供が求められるとともに、保育者には、子どもたちに「生きる力¹⁾」を育むことのできる保育の実践的力が求められている。そのために、保育者の養成に関しても、保育の実践的力形成のための養成カリキュラムの開発が強く期待されていると言えよう。

そこで本研究では、保育者養成に必要とされる自ら学び問題を解決する自己教育力と他

* 高松短期大学保育学科

** 広島大学大学院教育学研究科

人を思いやる心や感動する心といった豊かな人間性の育成を目指して高松短期大学幼児教育学科で実施されている特別カリキュラム「新入生歓迎セミナー」を対象として、参加観察とアンケート調査を実施し、特別カリキュラムの編成や改善のための基礎的資料を収集することを目的とする。

高松短期大学幼児教育学科は、児童教育学科から幼児教育学科への改組・転換を行い、新カリキュラムを組織してから今年度で3年目を迎える。幼児教育学科では、図1のように新入生歓迎セミナー、夏期セミナー、スキー研修といった特別カリキュラムを実施している。その中でも、1泊2日の新入生歓迎セミナーは、近隣の教育資源を活用した研修プログラムから構成されており、それらの研修プログラムを通じて、個々の学生が、保育者の素養として求められる自己教育力を養い、豊かな人間性を獲得することを目的としている。

新入生歓迎セミナーの各研修プログラムには1年生8名，2年生12名程度で構成されて

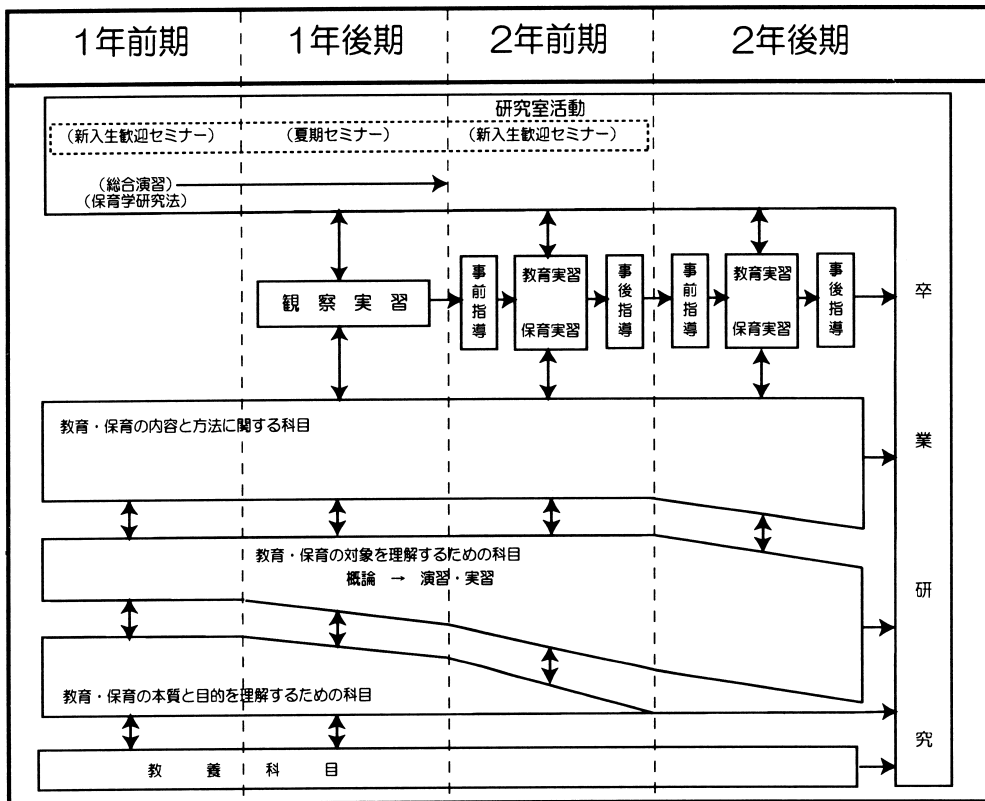


図1 幼児教育学科カリキュラム系統概念図²⁾

いる7つの研究室単位で参加する。少人数グループで研修プログラムに参加することで、研究室内の学生の相互理解を促し、豊かな人間性を育むことを可能にすると想定される。また、研修プログラムにおいては、少人数グループを組織し運営する保育者と同様の立場にたつて、それぞれが主体的にグループ活動に関与し、また自分自身の活動状況を自己評価するように配慮されているため、保育者としての自己教育力の形成に資するものとなると予想される。

2. 調査の実施

2-1. 調査目的と対象カリキュラム

本研究の目的は、特別カリキュラム「新入生歓迎セミナー」の実践を記述し、カリキュラム評価を行うことである。

対象とした特別カリキュラムは、高松短期大学幼児教育学科「新入生歓迎セミナー」であった。この特別活動カリキュラムは、指導目標として、豊かな人間性（コミュニケーション能力の育成、集団行動力の育成）自己教育力の育成を掲げ、さらに学生の興味・関心を高めさせるために、近隣教育資源のもつ教育力の活用にも配慮している。以下の～の指導方針に沿って構成されている。

コミュニケーション能力の育成：日常生活の中で、あいさつなどを含めた基本的な生活習慣の確立を目指す。

指導方針

学科、学年、研究室単位での活動では、学生とのコミュニケーションを行いながら、活動できるように配慮する。

集団行動力の育成：集団行動においては、自分の役割を理解させ、活動させることを目指す。

指導方針

学科、学年、研究室単位での集団活動では、学生が各自の役割を自覚しつつ、活動できるように配慮する。

自己教育力の育成：他人の手助けを借りなくても自立した生活が送れるように、自分で目標を立て、活動状況を評価させる。こうすることで、計画的に活動し、どのような環境にも適応する能力を身につけさせることを目指す。

指導方針

学生が自ら考え，工夫しながら活動できるように配慮する。

近隣の教育資源のもつ教育力の活用：大阪の娯楽施設を活用することで，セミナーに対する参加意欲を高めさせることを目指す。

指導方針

感動体験を通じて，自然環境や都市環境などのもつ教育力を十分に活用できるように配慮する。

2001年度のセミナーは表1のように実施された。セミナーの初日は，ユニバーサルスタジオでの自由行動，ホテルでの2年生が中心となつての研究室別の新入生歓迎スタンプ，セミナー二日目は，手塚治記念館での館内見学，ハーバーランドでの食事・買い物が実施された。

2 - 2 . 研究方法

2 - 2 - 1 . 観察参加および調査の対象

セミナー参加者である幼児教育学科の1年生（69名中67名）および2年生（60名中55名）が観察参加および調査の対象であった。

2 - 2 - 2 . 調査の時期

新入生歓迎セミナー（2001年4月13～14日）が開催された（表1）。調査はセミナー開

表1 平成13年度新入生歓迎セミナー日程

月 日	時 間	行 程
4 / 13 (金)	8 : 00	高松短期大学 出発
	12 : 20	ユニバーサルスタジオJAPAN
	17 : 30	出発
	18 : 00	ホテル着
	18 : 30	新入生歓迎セミナー
4 / 14 (土)	8 : 30	ホテル出発
	9 : 30	手塚治記念館
	11 : 00	出発
	12 : 00	ハーバーランド(自由食)
	14 : 30	出発
	18 : 30	(鳴門IC経由) 高松短期大学 到着

始時と終了時に実施した。

2 - 2 - 4 . 調査項目

セミナー開始時に行った調査（補助資料1）は、カリキュラム評価のための事前測定として実施されたものであるが、受講学生にセミナーの趣旨を理解させることで計画的に行動させるという指導上の目的も持っていた。調査項目は、セミナー参加による受講者の変容を調べるために、セミナー終了時に行う調査の項目と関連付けた項目を用いた。

また、セミナー終了時に行った調査の項目（補助資料2）では、指導計画に対応づけた以下の項目を設定した。

「10. あいさつ、テーブルマナーなど、身のまわりのことはきちんとできましたか。」（できた、できなかった）

「7. 研究室での活動はうまくいきましたか。」「8. 友達と協力して活動できましたか。」（うまくいった、うまくいかなかった）

「5. 困ったことはありましたか。」「6. 工夫したことはありましたか。」（あった、なかった）

「2. セミナーは楽しかったですか。」（たのしかった、どちらでもない、たのしくなかった）「12. また セミナーに参加したいですか。」（参加したい、参加したくない）

2 - 3 . 調査の結果と考察

事後アンケート調査の結果を表2に示した。なお、事前アンケートはセミナーの目的を学生に確認させるためのものでもあったために、参加に際しての指導を反映している可能性があるため、今回は事前事後の比較は行わなかった。そのため事前の調査結果については割愛した。以下では、新入生歓迎セミナーの指導方針 ~ に基づき、結果の分析と考察を行った。

コミュニケーション能力の育成：「10. あいさつ、テーブルマナーなど、身のまわりのことはきちんとできましたか。」という項目について、1年生では75%、2年生では92%の学生があいさつなどを心掛けたと回答した（ $\chi^2 = 51.56$, $df = 1$, $p < .01$ ）。この点について、学生が相互にコミュニケーションをとる機会が多いプログラムであったと考えられる。

また、学年別に差があり、1年生より2年生であいさつなどを心掛けたとする学生が多かった（ $\chi^2 = 6.04$, $df = 1$, $p < .05$ ）。2年生は、教育・保育実習など学外活

表2 新入生歓迎セミナーについての事後アンケート調査の結果(%)

1. 新入生歓迎セミナーは思っていたとおりでしたか。				
	はい	いいえ	人 数	
1年生	81	19	67	
2年生	87	13	55	
	84	16	122	
2. 新入生歓迎セミナーは楽しかったですか。				
	楽しかった	どちらでもない	楽しくなかった	人 数
1年生	100	0	0	67
2年生	89	11	0	55
	95	5	0	122
5. 困ったことがありましたか。				
	あった	なかった	人 数	
1年生	35	65	66	
2年生	47	53	51	
	40	60	117	
6. 工夫したことはありましたか。				
	あった	なかった	人 数	
1年生	17	83	65	
2年生	38	62	50	
	26	74	115	
7. 研究室での活動はうまくいきましたか。				
	できた	できなかった	人 数	
1年生	93	7	58	
2年生	78	22	54	
	86	14	112	
8. 友達と協力して活動できましたか。				
	できた	できなかった	人 数	
1年生	95	5	65	
2年生	98	2	53	
	97	3	118	
9. 新しい友達はできましたか。				
	できた	できなかった	人 数	
1年生	97	3	67	
2年生	46	54	52	
	75	25	119	
10. あいさつ、テーブルマナーなど、身のまわりのことはきちんとできましたか。				
	できた	できなかった	人 数	
1年生	75	25	65	
2年生	92	8	53	
	83	17	118	
12. また新入生歓迎セミナーに参加したいですか。				
	参加したい	参加したくない	人 数	
1年生	100	0	66	
2年生	92	8	53	
	97	3	119	

動が多く、あいさつ等の基本的な生活習慣の大切さを指摘される機会が多かったために、人とのふれあいの中で、意識的にコミュニケーションをとるように勤めていたものと考えられる。

集団行動力の育成：「7. 研究室での活動はうまくいきましたか。」という項目について、研究室での活動がうまくいったとする学生（86%）が多かった（ $\chi^2 = 57.14$, $df = 1$, $p < .01$ ）。うまくいったとする学生は、「1年生と2年生相互の交流を深めることができた」との記述が見られた。集団行動が要求される研究室単位での活動がうまくいっていたといえよう。

また、学年別に差があり、2年生（78%）より1年生（93%）の方がうまくいったとする学生が多かった（ $\chi^2 = 5.36$, $df = 1$, $p < .05$ ）。1年生でうまくいかなかったとする学生は、「1年生は何をしたらいいのかわからなかった」、2年生でうまくいかなかったとする学生は、「話し合いがうまくいかなかった」「出し物が準備不足だった」との記述が見られた。これらの点は、2年生が研究室の中でリーダーシップを発揮し、研究室活動を行わねばならなかったためと考えられる。

さらに、「8. 友達と協力して活動できましたか。」という項目について、活動できなかったとする学生（3%）より活動できたとする学生（97%）が多かった（ $\chi^2 = 102.54$, $df = 1$, $p < .01$ ）。対人行動が要求される場面において、学生は積極的に友達と協力して活動していたと考えられる。

自己教育力の育成：「5. 困ったことはありましたか。」という項目について、困ったことがあったとする学生（40%）より困ったことがなかったとする学生（60%）の方が多く（ $\chi^2 = 4.52$, $df = 1$, $p < .05$ ）、比較的スムーズにプログラムが進行したと考えられる。

さらに、1, 2年生が共通して困ったと記述した内容を挙げると、「バスの中が狭かった。」「ハーバーランドに何があるかわからずに時間を浪費した。」「先輩、後輩との学年を超えた交流が持てなかった。」であった。また、2年生の中には、「研究室での出し物が準備不足だった。」ということ述べる学生もあり、先輩として新入生のもてなしの不備を挙げる者もいた。

次に、「6. 工夫したことはありましたか。」という項目について、工夫したことがあったとする学生（26%）より工夫したことがなかったとする学生（74%）の方が多かった（ $\chi^2 = 26.30$, $df = 1$, $p < .01$ ）。また、その内容を挙げると、「USJでの

時間の使い方」「バスの中での交流」などを工夫したようである。

学年別に差があり、1年生(17%)より2年生(47%)で工夫したとする学生が多かった($\chi^2 = 6.51, df = 1, p < .01$)。特に、2年生は、「パーティーの準備を工夫した」という記述が見られた。つまり、パーティーの準備は2年生にリーダー的役割が求められており、前もって工夫する必要があったものと考えられる。

近隣の教育資源がもつ教育力の活用：「2. 新入生歓迎セミナーは楽しかったですか。」という項目について、どちらでもない、あるいは楽しくなかったとする学生(5%)より、楽しかったとする学生(95%)が多かった($\chi^2 = 99.18, df = 1, p < .01$)。また、「12. また新入生歓迎セミナーに参加したいですか。」という項目について、参加したくないとする学生(3%)より参加したいとする学生(97%)が多かった($\chi^2 = 103.54, df = 1, p < .01$)。これらのことは、近隣の娯楽施設を活用することで、学生のセミナーに対する参加意欲を高め、学生に感動体験を与えることができたと考えられよう。

3. 総合考察

本研究の目的は、幼児教育学科における実践活動を記述し、評価および検討を行うことで、カリキュラム編成に資する基礎的資料を収集することであった。以下では、アンケート調査結果に基づき、特別活動プログラムの評価、理論的検討、今後の課題について総合考察を行う。

3-1. 特別活動プログラムの評価

新入生歓迎セミナーの調査結果を4つの指導目標に焦点づけて評価すると、以下の4点に集約される。

第一に、本カリキュラムは、学生が相互にコミュニケーションをとる機会が多い、すなわち、コミュニケーション能力の育成に資するプログラムであるといえよう。特に、保育実習を終えたばかりの新2年生では、「あいさつなどを意識的に心掛けていた」との記述があった。保育実習の成果の定着のためにセミナーが有効に機能していることが示唆される。

第二に、本カリキュラムは、研究室単位での少人数グループ活動が随所に見られたので、対人行動や集団行動における各自の役割を理解させ、活動させる、すなわち集団行動力の育成に役立つ体験を提供できるものである。

第三に、本カリキュラムは、新入生歓迎パーティーでの準備など実行力を伴う課題がふんだんに織り込まれていたため、学生が自分自身で課題を発見し、解決することができる、すなわち自己教育力の育成に適当なカリキュラムであるといえよう。しかし、研究室単位での出し物などの準備について、一部の2年生が中心となって活動していたとの報告もあり、この点はプログラム実施に際して改善の余地が残されている。

第四に、本カリキュラムは、近隣の教育資源を活用することで、学生のセミナーに対する参加意欲を高め、学生に感動体験を与えることができるカリキュラムである。

以上の通り、本カリキュラムは、4つの指導目標に沿って、その有効性が確認された。1年生と2年生と教員とで構成される研究室制度を活用した特別活動プログラムは、異学年間、学生・教員間の交流を促進し、学生の参加意欲や幼児教育学科への帰属意識を高めるように働いていると考えられる。本プログラムの活動単位である研究室制度は、建学の精神に基づいて創設された制度であり、この学年縦割りの研究室制度が、特別プログラムが有効に機能する上で重要な役割を果たしていると考えられる。

3 - 2 . 特別活動プログラムの理論的検討

ところで、コミュニケーション能力、集団行動力、自己教育力、近隣の教育資源がもつ教育力の活用という4点に焦点づけて特別活動プログラムを評価してきたが、理論的にはどのように考えることができるのであろうか。

まず、コミュニケーション能力、集団行動力、自己教育力という能力に着目してきたが、それらの能力向上には、ある種の学習が生起しているものと考えられる。つまり、本プログラムの中では、規律ある活動が要求されており、あいさつ等のコミュニケーション・スキル、パーティーの準備等の問題解決スキル、研究室単位での活動等の集団行動スキルが、プログラムの流れに沿って主体的に参加する中で自然と獲得できるように配慮されている。これらの社会的スキルは、菊池・堀毛(1994)³⁾のいう10種類の社会的スキルの中の基本となるスキル、計画のスキル、年上・年下と付き合うためのスキルや集団行動のスキルに対応するものといえよう。

また、相川(2000)⁴⁾は、社会的スキルよりさらに包括的概念である社会的コンピテンスについて述べている。この社会的コンピテンスとは、社会的スキル(対人行動、課題関連行動、自己関連行動)と言われる行動となって現れる側面だけでなく、適応行動(自立機能スキル、身体的発達、言語的発達、学業能力)のような能力を含むものと仮定している。このような仮定に基づき、本プログラムとの関係を検討してみると、対人行動、課題

関連行動，自己関連行動にそれぞれ対応づけることができよう。

上述の通り，社会的学習理論から本プログラムにおける社会的スキルの学習過程を検討すると，対人レベル（コミュニケーション能力），集団レベル（集団行動力），個人レベル（自己教育力）において社会的スキルが獲得されると推察される。さらに本プログラムが非日常的な状況に設定されていたことから，所与の教育資源の中から状況を把握するような能力，すなわち状況レベルの学習も求められていたと考えられよう。

3 - 3 . 今後の課題

研究室制度を活用した特別活動プログラムの有効性が確認されたが，今後の特別活動の運営上，いくつかの課題も残されている。

まず，近隣の教育資源がもつ教育力を活用するために，いくつかの研修施設を設定しているが，毎年同じ研修施設を設定していると，2度目の参加になる2年生は新鮮さに欠けることとなる。現在のところ，学生主体で施設の設定を行っているがそれにも限界があるので，2ヵ年計画で利用施設の設定を行うなど工夫の余地が残されている。

さらに，本研究では特別活動プログラムについて社会的学習理論からの考察を試み，指導目標において掲げられている諸能力が社会的スキルと関連していることが示唆された。つまり，ここでの諸能力を測定するための行動指標として，社会的スキルの測定が適切であると我々は考えている。このため，実際に社会的スキルの向上が見られるのかどうかを検討するために，社会的スキルの測定尺度の利用などを視野に入れて研究を継続することも必要になろう。

なお，先に紹介した理論は従来型の授業研究の中で構築されてきた理論であって，特別活動プログラムの理論構築のための研究ではないことから，この領域における新たな事例の蓄積も必要になるであろう。その他にも，研究室単位で作り上げたスタンツ活動に着目すれば，協同学習の理論的研究（例えば，Johnson & Johnson, 1991⁵⁾），あるいは発達の視点からアプローチすれば，小学校・中学校・高等学校で実施されている総合的学習の実践研究（例えば，弓野，2001⁶⁾；西浦・中條，2000⁷⁾）との関係を解明しなければならないなど，この領域における理論構築のためには多くの課題が挙げることができる。

今回は高松短期大学の新生歓迎セミナーを取り上げ，その実践を評価した。同学の幼児教育学科では野外体験を主体とした夏期セミナーも実施している。夏期セミナーのカリキュラム評価を行うこと，さらに，1年前期に参加する新生歓迎セミナーと1年後期の夏期セミナー活動，そして迎える側として参加する2年前期の新生歓迎セミナーという

3つの特別カリキュラムが全体として保育者養成にどのような教育効果を持つかを評価し、それに基づく改善を積み重ねることが今後の課題となろう。

引用文献

- 1) 岡東壽隆・林孝・曾余田浩史 重要用語300の基礎知識16巻：学校経営重要用語300の基礎知識 明治図書 2000
- 2) 松原勝敏 短期大学における保育者養成カリキュラムに関する一考察 高松短期大学児童教育学科の幼児教育学科への改組転換 高松大学紀要29 pp.25 - 49 1998
- 3) 菊池章夫・堀毛一也(編著) 社会的スキルの心理学：100のリストとその理論 川島書店 1994
- 4) 相川充 人づきあいの技術 サイエンス社 2000
- 5) Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Smith, K. A. (Eds.) *Active learning : Cooperation in the college classroom*. Interaction Book Company, 1991.
(ジョンソン, D. W.・ジョンソン, R. T.・スミス, K. A. 関田一彦(監訳) 学生参加型の大学授業 玉川大学出版部 2001)
- 6) 弓野憲一 総合的学習の学力：測定と評価技法の開発 明治図書 2001
- 7) 西浦和樹・中條和光 「生活体験学校を通じた新しい学校づくり」に学ぶ：総合的な学習のカリキュラムの検討。高松大学紀要34 pp.17 - 32 2000

附 記

本研究は平成12年度～14年度高等教育研究改革推進経費(日本私立学校振興・共済事業団)の補助を受けた。

謝 辞

本研究の実施に当たり、セミナー活動を支援して下さった高松短期大学幼児教育学科教員及び事務スタッフの皆様に深く感謝致します。

補助資料 1

新入生歓迎セミナー 参加者アンケート (セミナー開始時)

() 研究室 学籍番号 () (男・女) 名前 ()

1. 新入生歓迎セミナーは楽しみですか。 (楽しみ どちらでもない 楽しみでない)

2. どんなことを楽しみにしていますか。

ユニバーサルスタジオJAPAN (楽しみ どちらでもない 楽しみでない)

新入生歓迎パーティー (楽しみ どちらでもない 楽しみでない)

手塚治虫記念館 (楽しみ どちらでもない 楽しみでない)

ハーバーランド (楽しみ どちらでもない 楽しみでない)

王子動物園 (楽しみ どちらでもない 楽しみでない)

3. その他に楽しみにしていることがあれば書いてください。

4. 新入生歓迎セミナーへの参加目的を考えてみよう。

ご協力ありがとうございました。

補助資料2

新入生歓迎セミナー 参加者アンケート(セミナー終了時)

()研究室 学籍番号() (男・女)名前()

1. 新入生歓迎セミナーは思っていたとおりでしたか。

(はい いいえ)

2. 新入生歓迎セミナーは楽しかったですか。

(楽しかった どちらでもない 楽しくなかった)

3. それはどんなことですか。

ユニバーサルスタジオJAPAN

(楽しかった どちらでもない 楽しくなかった)

新入生歓迎パーティー

(楽しかった どちらでもない 楽しくなかった)

手塚治虫記念館

(楽しかった どちらでもない 楽しくなかった)

ハーバーランド

(楽しかった どちらでもない 楽しくなかった)

4. その他に楽しかったことがあれば書いてください。

5. 困ったことはありましたか。

(困ったことがあった 困ったことがなかった)

(どんなことですか)

6. 工夫したことはありましたか。

(工夫したことがあった 工夫したことがなかった)

(どんなことですか)

7. 研究室での活動はうまくいきましたか。

(うまくいった うまくいかなかった)

(どんなことですか)

8. 友達と協力して活動できましたか。

(うまくいった うまくいかなかった)

(どんなことですか)

9. 新しい友達はできましたか。

(できた できなかった)

10. あいさつ，テーブルマナーなど，身のまわりのことはきちんとできましたか。

(できた できなかった)

11. ふだんと違う生活をしてみて，一番強く感じたことはどんなことですか。

(感じたこと)

12. また新入生歓迎セミナーに参加したいですか。

(参加したい 参加したくない)

高松大学紀要

第 40 号

平成15年 9月25日 印刷

平成15年 9月28日 発行

編集発行 高松大学
高松短期大学
〒761-0194 高松市春日町960番地
TEL (087) 841 - 3255
FAX (087) 841 - 3064

印刷 株式会社 美巧社
高松市多賀町 1 - 8 - 10
TEL (087) 833 - 5811